

方言コーパスを利用した動詞活用の分析

徳之島方言二千文を用いて

福嶋 秩子

1. はじめに

沢木幹栄・中島由美と発表者は現在方言コーパスを利用して徳之島方言辞典の作成を行っている。見出し語形や文法的情報の記述の形式などを決定するために、当該方言の文法の分析が必要であり、そのためにも方言コーパスを活用している。このプロジェクトの成果に関しては折に触れ報告してきた（沢木他 2001、2003、2005、2006）。本発表では、発表者が担当した動詞活用の分析について報告する。すでに 2006 年 3 月発行の『徳之島方言二千文辞典』（岡村他 2006）において一部を報告したが、今回報告するのは、新しい調査データも加え再分析を行った結果である。

2. データと分析の方法

使用した方言コーパスは「徳之島方言二千文」である。アンリ・フレの "*Le livre des deux milles phrases*" (1953) にヒントを得て川本茂雄が作成した『日本語二千文』（1971）を元に、鹿児島県大島郡天城町浅間の生え抜きである方言研究者岡村隆博の協力を得て作成した「文の辞典」である（このデータの詳細は、沢木他 2001・岡村他 2006 参照）。動詞の活用の分析にあたって以下のような作業を行った。

- A. 文節切りしたデータから動詞を抜き出し、動詞のリストを作成する。面接による動詞活用調査により、主要な動詞の詳細な活用表と、リスト中のすべての動詞の基本的活用形式のリストを作成する。その分析から、活用の型を決定し、動詞の分類を行う。
- B. 見出し語形などを決定するために、方言コーパス中のすべての動詞の用例について、可能な活用形、活用形の分布、後続形式との関係などを網羅的に確認、調査する。

なお、本稿での徳之島浅間方言データの表記は、標準的なキーボードから入力可能な文字のみを使用した簡略な表記である。主なものを示せば、中舌母音の *i*、*ë* は大文字の *I*、*E* で、声門閉鎖音は *'* で、語頭に現れる声門閉鎖音のない「軟らかい母音」は *j* や *w* を付して表記する。また、喉頭化子音は大文字で、撥音は *N* で、促音は同じ子音を重ねて表記する。また、アクセントは高いところを [] でくくって示す。

3. 徳之島浅間方言の動詞の活用の型

A の作業から、規則動詞 ()・() と不規則動詞を大別した（表 1 参照）。

各動詞には、基本語幹、融合語幹、音便語幹の三つの語幹があり、これらの語幹からすべての活用形が作られる。たとえば、規則動詞 () *kamjui* (食べる) は、*kam-* が基本語幹、*kamj-* が融合語幹、*kad-* が音便語幹である。規則動詞 () *wI:jui* (起きる) は、*wI:-* が基本語幹、*wI:j-* が融合語幹、*wI:t-* が音便語幹である。*jui* 終止形を見出し語とし（このことについては後述）三つの語幹、さらに連用形・否定形・テ形を活用代表形として示す。なお、徳之島浅間方言には、「一つのアクセント単位のなかに必ず heavy syllable（長母音、二重母音、撥音、促音）がある」という法則がある。この法則に従う結果、語幹に示したものと異なる母音の長短や促音を伴った活用形が現れることがある。また、一定の音韻環境で *r* 音が脱落する。

規則動詞()は、基本語幹が子音語幹である動詞で、概ね本土方言の五段活用の動詞に対応する。基本語幹の最後の子音に応じて、音便語幹の最後の子音は d、zj、cj、ccj、t のいずれかとなる。ただし、ラ行五段動詞は原則 t であるが、語幹最後の母音がイ段のとき cj となることがある。また、ワ行五段活用動詞の基本語幹は、ラ行五段活用動詞と同じく、r 語幹である。一段活用動詞の一部がラ行五段動詞と同じ活用をすることに注意が必要である(表1の「遠慮する」「消える」「着る」「生きる」類例については後述)

規則動詞()は母音語幹をもつ動詞で、一段活用の動詞のほとんどがここに含まれる。規則動詞()のラ行五段活用動詞との違いは、連用形だけである。規則動詞()の連用形は基本語幹+iで作られるが、規則動詞()の連用形は基本語幹そのままである。

不規則動詞のグループ()には、「する」「来る」の他、「見る」「似る」「煮る」「言う」「居る(「おる」に対応)」「ある」が含まれる。これらの動詞では、基本語幹と融合語幹が必ずしもはっきりとは分離していない。また、「する」はさらに音便語幹も融合語幹と同形であり、jui 終止形とテイル形がどちらも sjui となる(表2参照)。「見る」「似る」「煮る」「言う」の音便語幹の最後の子音は cj、「居る(おる)」「ある」は t である。

4. 動詞活用形の作り方

表2に、徳之島浅間方言における動詞活用形の生成のありさまを示す。規則動詞()から「食べる」「なる」「会う」、規則動詞()から「起きる」、不規則動詞から「する」について、融合語幹からなる活用形、基本語幹からなる活用形、音便語幹からなる活用形の順に並べてある。それぞれの語幹+活用語尾で活用形が生成される。

5. 見出し語の決定

Bの作業から、方言辞典の見出し語形を jui で終わる終止形とすることにした。浅間方言には jui で終わる終止形や juN で終わる終止形(それぞれ「jui 終止形」「juN 終止形」と呼ぶ)があり、さらに連用形も終止形として使われることが知られているが、方言コーパスの用例において、juN で終わる形式は言い切りで使われず、常に他の諸形式が続いていることがわかったからである。

徳之島方言二千文(以下「二千文」)に jui 終止形が単独で文を終止する言い切りの例は84例あったが、juN 終止形が単独で文を終止する例は1例もなかった。また、jui 終止形は、-juija:(~ね)、-juijo:(~よ)、-juisjarE:(~だろう)などという形でも使われている。一方、juN 終止形は、-juNda:(~よ)となる例が最も多く、他に -juNga(~か)や -juNcjI(~って)などがある。なお、名詞が後接する連体形は、juN 終止形と同形である。用例数では、jui 終止形より juN 終止形が多いが、juN 終止形は単独で文を終止しないことを考慮して、jui 終止形を見出し語とした。

6. 活用語尾の使い分けのパターン

融合語幹からなる形式には、まず jui 終止形と juN 終止形の他に、ju: 終止形があり、これらはあとに続く語により表3のように使い分けられている。この終止形の活用語尾の使い分けのパターンは、テイル形(音便語幹+ ui)や過去形1・2(音便語幹+ I、aN)にも共通である。+ui/aiの系列は言い切りで使われ、後ろに続く語により+uN/aNもしくは+u:/a:が現れる。前者は、融合語幹が語源的に連用形+ヲリとの複合に、テイル形や過去形がヲリやアリとの複合にさかのぼると考えれば当然ではある。また、否定形については、aNとa:の交替の条件が共通である。形容詞は、形容詞の語幹+サアリが語源といわれるが、+haiだ

表1 徳之島浅間方言 動詞の活用型の型

代表語 (本土方言 対応語)	見出し語				活用代表形		
	jui終止形 融合語幹+	基本語幹	融合語幹	音便語幹	連用形 基本語幹+	否定形 基本語幹+	テ形 音便語幹+

規則動詞(Ⅰ) 子音語幹

バ行五段活用	d	遊ぶ	[ʼaslbju:]	'aslb-	'aslbj-	'asld-	[ʼaslbɪ:]	[ʼaslbəN]	[ʼas:l]dl
マ行五段活用		食べる	kamju[ɪ]	kam-	kamj-	kad-	kami[:]	kama[N]	ka:[dl]
ガ行五段活用	zj	漕ぐ	kugju[ɪ]	kug-	kugj-	kuzj-	kugi[:]	kuga[N]	ku:[zj]
(カ行五段活用)		行く*	[ʼikju:]	'ik-	'ikj-	'izj-	[ʼiki:]	[ʼikaN]	[ʼizj:]
ナ行五段活用		死ぬ	[slɲju:]	slɲ-	slɲj-	slzj-	[slɲi:]	[slɲjaN]	[slzj:]
カ行五段活用	cj	聞く	[Kikju:]	Kik-	Kikj-	Kicj-	[Kiki:]	[KikaN]	[Kicj:]
サ行五段活用		話す	hanasju[ɪ]	hanas-	hanasj-	hanacj-	hanas[:]	hanasja[N]	hana:[cj]
タ行五段活用	ccj	待つ	macju[ɪ]	mac-	macj-	maccj-	mac[:]	mata[N]	mac:[cj]
ラ行五段活用	t	なる	naju[ɪ]	nar-	naj-	nat-	na[ɪ]	nara[N]	na:[t]
(上一段活用)		遠慮する (オデル)**	[ʼuzɺju:]	'uzɺ-	'uzɺj-	'uzɺt-	[ʼuzɺɺ:]	[ʼuzɺɺraN]	[ʼuzɺɺ:t]
(下一段活用)		消える**	[Kicju:]	Kiɺ-	Kicj-	Kiɺt-	[Kicɺɺ:]	[KicɺɺraN]	[Kicɺɺ:t]
ワ行五段活用		会う	[ʼoɺju:]	'oɺ-	'oɺj-	'oɺt-	[ʼoi]	[ʼoɺraN]	[ʼoɺ:t]
ラ行五段活用	cj	切る	Kiju[ɪ]	Kir-	Kij-	Kicj-	Kiri[:]	Kira[N]	[Ki:cj]
(上一段活用)		着る**	[Kiju:]	Kir-	Kij-	Kicj-	[Kiri:]	[KiraN]	[Kicj:]
		生きる**	'ikju[ɪ]	'ikir-	'ikj-	'ikcj-	'ikiri[:]	'ikira[N]	'iki:[cj]

*「行く」はカ行五段活用の例外 **一段活用の例外

規則動詞(Ⅱ) 母音語幹

上一段活用	t	起きる	[ʼwtju:]	'wt-	'wtj-	'wtɺ-	[ʼwt:]	[ʼwtɺraN]	[ʼwtɺ:t]
下一段活用		出る	'izju[ɪ]	'izj-	'izjɺ-	'izjɺt-	'izjɺ[:]	'izjɺra[N]	'izjɺ:t]
		変える	[kE:ju:]	kEɺ-	kEɺj-	kEɺt-	[kEɺ:]	[kEɺraN]	[kEɺ:t]

不規則動詞(Ⅲ)

サ行変格活用	sj	する	[sju:]	s-/sj-	sj-	sj-	[sɺ:]	[sjaN]	[sɺ:]
カ行変格活用	cj	来る	kju[ɪ]	k-	kj-	Cj-	ki[:]	ku[N]	[Cj:]
(上一段活用)		見る	nju[ɪ]	n-/ɲj-	ɲj-	Ncj-	ni[:]	nja[N]	N:[cj]
		似る	[ɲju:]	n-/ɲj-	ɲj-	Ncj-	[ni:]	[njaN]	[Ncj:]
		煮る	[ɲju:]	n-/ɲj-	ɲj-	Ncj-	[ni:]	[njaN]	[Ncj:]
(ヤ行五段活用)		言う	[ju:]	j-	j-	'icj-	[i:]	[jaN]	[icj:]
(ラ行五段活用)	t	居る(おる)	[wui]	wur-	w-/wuj-	wut-	[wui]	[wuraN]	[wut:]
		ある	[ai]	'ar-	'aj-	'at-	[ai]	('ana[N])	[a:t]

表2 徳之島浅間方言における動詞活用形の生成

		子音語幹			母音語幹	
		規則(I) -d 食べる	規則(I) -t なる	規則(I) -t 会う	規則(II) -t 起きる	不規則(III) する
		kamju	naju	'ojui	'wlju	sjui
基本語幹		kam-	nar-	'or-	'wl-	s- / sj-
融合語幹		kamj-	naj-	'oj-	'wlj-	sj-
音便語幹		kad-	nat-	'ot-	'wlt-	sj-

融合語幹+	活用語尾		kamj-	naj-	'oj-	'wlj-	sj-
ju終止形	-ui	～る[言い切り、+ja:(ね)jo:(よ)sjarE:(だろう)]	kamju[i]	naju[i]	['ojui]	['wlju]	[sjui]
juN終止形	-uN-	～る[+da:(よ)oj(って)do:(ぞ)ga(か)他]	kamju[Nda:]	naju[Nda:]	['ojuNda:]	['wljuNda:]	[sjuNda:]
連体形	-uN	名詞が後接	kamju[N]	naju[N]	['ojuN]	['wljuN]	[sjuN]
禁止形1	-uNna	～るな	kamjuN[na]	najuN[na]	['ojuNna]	['wljuNna]	[sjuNna]
ju終止形	-u:	～る[+ml(のか)sl(の、もの、こと)wa:(だね)]	kamju:[ml]	naju:[ml]	['oju:]ml]	['wlju:]ml]	[sju:]ml]
ju終止形	-u	～る[+mE:(まい)biki(べき)gE:sl(ように)tuka(～したばかり)]	kamjuE[:] kamju:[tu]ka	najuE[:] naju:[tu]ka	['oju:mE:] ['oju:]tuka	['wljuE:] ['wlju:]tuka	[sju:mE:] [sju:]tuka
係結形	-u:ru	nu:ga(どうして)やdu(ぞ)に対する結び	kamju:[ru]	naju:[ru]	['oju:]ru	['wlju:]ru	[sju:]ru

基本語幹+	活用語尾(I・III/II)		kam-	nar-	'or-	'wl-	s- / sj-
連用形	-i/φ	～る[言い切り、+助詞、動詞/補助動詞]	kami[:]	na[i]	['oi]	['wl:]	[sl:]
禁止形2	-iNna, -ina, Nna	～るな	kamiN[na]	nai[na]	['oi]na ['oN]na	['wlN]na	[suN]na
否定形	-aN/-raN	～ない	kama[N]	nara[N]	['oraN]	['wlraN]	[sjaN]
否定過去形1	-ada:tl/ -rada:tl	～なかった[言い切り、+助詞]	kamada:[tl]	narada:[tl]	['orada:]tl]	['wlrada:]tl]	[sja:da:]tl]
否定過去形2	-adataN/ -radataN	～なかった[+助詞]	kamada[taN]	narada[taN]	['oradataN]	['wlradataN]	[sja:datan]
使役形	-asju/ -rasju	～させる	kamasju[i]*	narasju[i]*	['orasju]*	['wlrasju]* [た だし植物)人は 通常は ['wlsiasju]*	[sja:sju]* [slm]ju]*
受身・可能形	-ajui/ -rajui	～られる	kamaju[i]*	naraju[i]*	['oraju]*	['wlraju]*	[sja:ju]*
意向形	-a:/-ra:	～よう	kama[:]	nara[:]	['ora:]	['wlra:]	[sja:]
直接命令形	-o:/-ro:	～ろ	kamo[:]	na:ro[:]	['oro:]	['wlro:]	[sjo:]
間接命令形	-i:/-ri:	～ろ(と)	ka:[ml]	na:[rl]	['o:]rl]	['wl:]rl]	[sjl:]
丁寧形	-ejui/ -re:ju	～ます	kame:ju[i]*	nare:[ju]*	['ore:]ju]*	['wlre:]ju]*	[sje:ju]*
ru終止形	-u/-ru	～る[+mE:(まい)biki(べき)gE:sl(ように)tuka(～したばかり)]	-	narumE[:] naru:[tu]ka	['oru:mE:] ['oru:]tuka	['wlrumE:] ['wlru:]tuka	-

音便語幹+	活用語尾		kad-	nat-	'ot-	'wlt-	sj-
テ形	-l	～て	ka:[dl]	na:[tl]	['o:]tl]	['wl:]tl]	[sjl:]
過去形1	-l	～た[言い切り、+助詞]	ka:[dl]	na:[tl]	['o:]tl]	['wl:]tl]	[sjl:]
過去形2	-aN	～た[+助詞]	kada[N]	nata[N]	['otaN]	['wltan]	[sjan]
タリ形	-ai	～たり	kada[i]	nata[i]	['ota:]	['wltai]	[sja:]
条件形	-lka	～れば	ka:[dl]ka	na:[tl]ka	['o:]tlka	['wl:]tlka	[sjl:]ka
テイル形	-ui	～ている	ka:[dui]*	na:[tui]*	['o:]tui]*	['wl:]tui]*	[sju:]* [sju:]*

*この形式自身が活用する

けでなく + haN も言い切りで使われる。ただし、+ haN が言い切りで使われるのは、理由を表わすときという限定がある。

表3 活用語尾の使い分けの例

	言い切りで使う。 + ja:(ね), jo:(よ), sjarE:(だろう) 等	言い切りでは使われない。+ da:(よ), cjI(って), do: (ぞ), ga(か), du(ka), kja (だが), gadaN(のか) 等	言い切りでは使われな い。+ mI(のか), sI(の, もの,こと), wa:(だね) 等
終止形	jui 終止形 jamju[i] 痛む	juN 終止形 sjuN[da:] するよ	ju:終止形 cIkju:[mI] つくか
テイル形	音便語幹 + ui Kicju[i] 着ている	音便語幹 + uN KibatuN[da:] 働いているよ	音便語幹 + u: [mugEtu:]mI 動いてい るか
過去形	音便語幹 + I 'izjI:[tI] でかけた	音便語幹 + aN 'izjI:[tI] cjaN[da:] 出てきた よ	音便語幹 + a: [sja:]sIja したのは
否定形		基本語幹 + aN ただし、これ は言い切りで使われる。 ['o:raN] 合わない	基本語幹 + a: 'ana:[mI] ないか
形容詞	-hai [Ma:]hai 旨い	-haN 理由を表わすときに言い 切りで使われる。 'iba:[haN] 狭くて	-ha: juta:[ha]mI よろしい か

表2にもどると、終止形の活用語尾としてさらに ju 終止形と ru 終止形が区別してある。これは、mE:(~まい) bi:ki(~べき) gE:sI(~ように) や tuka(~したばかり) が続くときに、ラ行五段活用動詞と規則動詞()では ru が現れる(['uwaru][mE:] 終わるまい)のに対し、ラ行五段以外の規則動詞()では ju あるいは ju:が現れる(mucjumE[:] 持つまい)というきれいな相補分布が二千文の用例で見られたからである。長音になるかどうかは最初に述べた法則で説明できる。前段落で述べた ju:終止形と同じものとみなし、あわせて「準体形」とすることも考えられるが、ju 終止形では ru 終止形との相補分布があり、ju:終止形では相補分布はないということが説明できないため、ここでは区別しておく。なお、表2で、二千文に現れず動詞活用調査ではじめて出てきた語形は斜体で示した。不規則動詞()では、'ai(ある)は ru 終止形とみなされる 'aru、それ以外の動詞は ju 終止形が現れる。

なお、ju 終止形が後続の形式によって ju と ju:のどちらでもありうることからすると、ju:終止形と ju 終止形とすることは誤解をうみやすい。ju:終止形 A と ju:終止形 B とすることも考えられよう。

7. 係結形

融合語幹からなる形の中に、係結形がある。nu:ga(どうして)で始まる文の結びや du(ぞ)を受ける文の結びが融合語幹 + :ru の形となる。たとえば、「どうして食べるの?」[nu:]ga kamju:[ru]、「私が起きるぞ」waga:[du] ['wI:ju:]ru となる。二千文では nu:ga の結びが一例のみ見つかった。

8. 連用形

徳之島方言の動詞の連用形は終止形として使われるといわれるが、二千文で文の言い切りとして使われた例は、不規則動詞()の wui(いる)と 'ai(ある)だけであった。ただし、連用形に da:(よ)、ga(か)、du(ぞ)、ba:(~するのがいや)などが接続する例がある。これらは終止形としての用法である。表1で示した連用形は、このようなときに使われる形である。通常の連用形としての用法で、-guro:hai(~にくい) -narai(~できない) -cja:hai(~たい)などが接続して複合語をつくる場合は、短母音の形が使われる(行くの連用形 ['iki:] 行きたい ['ikicja:]hai)。

9. 全動詞の基本活用表

表1の活用の分類にもとづき、二千文に出てくるすべての動詞について、その基本活用表を作成した。索引として標準語を使い、その五十音順に並べた。意味と本土方言の対応語形に加えて、基本活用形として、jui 終止形、連用形、否定形、テ形の4語形、さらに、基本語幹と音便語幹の末尾子音も示した。紙幅の都合で表は割愛する。

10. 一段活用動詞におけるラ行五段化

表1で、規則動詞()に一部の一段活用動詞が含まれていたが、他にどんな動詞があるか、動詞活用調査で確認した。連用形が基本語幹 + i となるもの(すなわち、rI 語尾をもつもの)がその目安である。二千文で使われていないものも含め、13語見つけた。一方、内間1979によれば、同じ徳之島の徳之島町井之川の方言は、所収の動詞の連用形がすべて基本語幹 + i となっていた。そこで、内間・崎村らの先行研究により奄美・沖縄方言の連用形を調査してまとめたものが、表4である。上半分に浅間方言で基本語幹 + i となる語、下半分に浅間方言で基本語幹そのままである語をならべた。基本語幹 + i となる語をゴシックとした。すると、同じ徳之島でも、規則動詞()・() 両タイプの一段活用動詞をもつ松原・亀徳(浅間と同じ傾向と思われる)と、規則動詞()(子音語幹の動詞)の一段活用動詞だけをもつ伊仙町目手久と井之川とに分かれるようである。一方、奄美大島の一部や沖永良部島、沖縄本島には、ほとんどの一段活用動詞が規則動詞()(母音語幹の動詞)であるところもあるようだ。

平山他 1966『琉球方言の総合的研究』の「第4編 文法」において、奄美・沖縄方言の動詞の分析のところを見ると、表4から予想されたことがまさに見てとれた。奄美方言の規則動詞の多くは、I・ の二つのタイプに分けられ、たとえば、以下の様に分類されている(Vは母音音素、Cは子音音素、Sは半母音音素である) は、発表者の言う規則動詞()で、基本語幹が子音語幹であるグループ、 は、規則動詞()で、基本語幹が母音語幹であるグループである。一段活用動詞の代表的動詞の ・ への分類のされ方が方言により異なっていた。

	基本語幹	融合語幹	連用語幹	音便語幹
I	C	C,CS	C	C
II	CVC	CVC	C	CVC

同書 p.235 の奄美方言の連用形のまとめとして、次のように述べられている。「連用形そのものの形態では、各方言の間にちがいはみられない。共通して言えることは、共通語の一段活用にあたる動詞の連用形語尾が-ri 語尾化することによって、方言の動詞のうち「取る」の類の活用形式に類推変化する傾向が見えるということである。(中略)この傾向が強まると、規則活用動詞では の類として と区別されていた動詞が、 の類に統合する結果になる。」表4で示された徳之島浅間方言における連用形の状況は、この一段活用動詞のラ行五段動詞

表4 奄美沖繩方言の連用形における-r語尾の分布

		徳之島 天城村 浅間	徳之島 天城村 松原	徳之島 徳之島 町 亀 徳	徳之島 徳之島 町 井 之川	徳之島 伊仙町 目手久	大島 大和村 大字 大和浜	大島 瀬戸内 町 古 仁屋	大島 宇検村 湯湾	喜界島 志戸桶	沖永良 部島 田皆	沖繩本 島 首 里
		徳之島 方言二 千文・福 嶋調査	崎村弘 文1982	崎村弘 文1983	内間直 仁1979	崎村弘 文1981	奄美方 言分類 辞典	内間直 仁1984	内間直 仁1984	内間直 仁1978	内間直 仁1984	沖繩語 辞典
ラ行五段	切る	Kir:			k'iri		kiri	k'iri	k':		k':	cii
上一段	着る	Kir:	kiri	kiri	k'iri	kiri	kiri	k'iri	k':		k':	cii
上一段	座る(キル)	jir:			jiri		'iri	jiri	ji:		ji:	
上一段	射る	'ir:					'iri					'ii
上一段	干からびる (ヒル)	slr:					hiri					
上一段	過ぎる	slgir:					sīgiri					
下一段	煮える	nir:					niri					
上一段	生きる	'ikir:					'iki					
上一段	錆びる	sjabir:										
上一段	信じる	siNzlr:					sinzi					
上一段	伸びる	nubir: nubi:新					nubi					
上一段	遠慮する (オデル)	'uzlr:										
下一段	疲れる	kutair:										
下一段	消える	Kir:					kjee					
ラ行五段	蹴る	kl:	kīri	kīri	kīri	kīri	xīri	kīri		çī:	çiri	
下一段	受ける	'ukl:	'ukī	'ukī	'ukīri	'ukīri	'uxī	'ukī	'ukī	'ukī	'uki	'ukii
上一段	起きる	'wl:	'ui	'wīi	'wī:ri	'u'iri	hwīi	'uhī	hē:	wī:	'ui	'ukii
上一段	落ちる	'utl:			hantiri		'u θ ī	'utī	'uti	k'anti	'uti	
下一段	上げる	'agl:			'agīri		'agī	'agī	'agī	'agī	'agi	
上一段	降りる	'url:					'urī					
下一段	変える	kE:					xee					
下一段	出る	'izjl:					'izi					
下一段	当てる	'atl:					'a θ ī					

太字: -r語尾

語形表記で声門閉鎖音は'で代用した

への類推変化の傾向の中間段階、すなわち、この変化が一語一語広がっていく lexical diffusion (語彙的拡散) の一断面をきりとったものであるということができよう。なお、表 4 の浅間方言の「伸びる」で新しいとされている nubi: は、共通語の影響を受けた語形ではないかと思われる。

11. まとめ

徳之島方言二千文は、動詞の活用など文法的要素に捉われず、文意の表現に集中して自由に作成された。そのようなコーパスの分析と動詞の活用に限定した調査を併用することで、見逃されがちだった活用形の接続形式や分布に焦点をあてた分析ができたのではないかと考える。

謝辞：本調査研究は科学研究費基盤研究 (B) 「徳之島方言辞典語彙編の作成のための研究」(研究代表者：澤木幹栄 (信州大学)) によって行った。また、動詞活用表作成の過程で、上野善道 2001 のデータを利用させていただいた。記して謝意を表する。

参考文献

- 内間直仁 1978 「喜界島志戸桶方言の文法」『琉球の方言』4 号
内間直仁 1979 「徳之島井之川方言の文法」『琉球の方言』5 号
内間直仁 1984 『琉球方言文法の研究』笠間書院
上野善道 2001 「徳之島浅間方言の活用形アクセント資料」『琉球の方言』25 号
岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子・菊池聡 2006 『徳之島方言二千文辞典』信州大学人文学部
長田須磨・須山名保子編 1977 『奄美方言分類辞典』笠間書院
国立国語研究所編 1975 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
崎村弘文 1981 「徳之島の方言(1) - 伊仙町目手久方言の実態 - 」『鹿児島大学文科報告』17-1
崎村弘文 1982 「徳之島の方言(2) - 天城町松原方言の実態 - 」『鹿児島大学文科報告』18-1
崎村弘文 1983 「徳之島の方言(3) - 徳之島町亀徳方言の実態 - 」『鹿児島大学文科報告』19-1
沢木幹栄 2003 「方言コーパスによる徳之島方言の研究」『人文科学論集 人間情報学科編』Vol.37. pp.85-90. 信州大学人文学部
沢木幹栄・福嶋秩子・中島由美・岡村隆博 2001 「方言コーパスを利用した方言研究の可能性 『徳之島方言辞典』作成のために」『日本方言研究会第 73 回研究発表会発表原稿集』pp.37-46
Sawaki, Motoei, Chitsuko Fukushima and Yumi Nakajima, 2003 "Dialect Corpus as a Resource for Dialect Dictionary" A paper presented at 4th International Congress of Dialectologists and Geolinguists, Riga, Latvia.
沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子 2005 「徳之島方言二千文辞典」『日本語学会 2005 年度秋季大会予稿集』pp. 229-236
Sawaki, Motoei, Yumi Nakajima and Chitsuko Fukushima. 2006. "Making Multimedia Dialect Dictionary as a Database with Indexes and Cross-references" A paper presented at 5th International Congress of Dialectologists and Geolinguists, Minho, Portugal.
Sawaki, Motoei, Chitsuko Fukushima, and Yumi Nakajima. 2006. "Dialect Corpus as a Resource for Dialect Dictionary" *Proceedings of the 4th International Congress of Dialectologists and Geolinguists*. Latvian Language Institute, University of Latvia: Riga. pp. 431-438.
平山 輝男・大島 一郎・中本 正智 1966 『琉球方言の総合的研究』明治書院
Frei, Henri. 1953. *Le livre des deux milles phrases*. Genève: Droz.
アンリ・フレ 1971 『日本語二千文 語研選書(3)』早稲田大学語学教育研究所